⑨前潟の青嵐

「しまかげに　吹来る風も　青嵐
　遠近見ゆる　稲の色かな」

荒神社（船本）の由緒に「延宝年間（1673～1688）に前潟全土の開墾工事が完成し、美しく青い田が眼前に展開した。」とあるように、前潟は開墾地であったが、明治の頃には青葉をたわわに付けた木々もあちらこちらにあった。

その木陰からは、幾枚もの田が広がっているのが見え、風に稲がなびく状はさぞ美しかったであろう。

「青嵐」とは青葉を吹き渡る風のという意味である。

前潟に広がる水田

⑩松が岡の暮雪

「松岡の　宮居に積なし　雪を
　詠めつくした　今日の暮かな」

「松岡の宮居」とは、長津の丘の上に鎮座している当社の飛び地境内神社である天満宮のことである。

天満宮は学問の神、雷除けの神として知られる菅原道真を祀っており、境内には梅が数多く植えられている。

「松岡」は天満宮が鎮座している辺りを「松ヶ岡」と呼んでおり同一の場所である。

今でこそ冬に雪が積もる事は珍しくなってきたが、明治の頃は雪もよく降っていて、夕暮れ時に、天満宮の境内に降る雪の眺めが美しかったのであろう。

雪景色の天満宮

御崎宮の梵鐘

当社の由緒には「永享四年（1432）十月二十三日早島丑寅御前大明神の梵鐘が鋳造された。」とあり、梵鐘には「永享壬子十月二十二日備中国都宇郡撫河郷隼島庄謹書等勲之丑寅御前鐘奉鑄以信心緇素之施財者也」と刻まれており、都宇郡撫河郷隼島庄から御崎宮（鶴崎神社）へ鋳造寄進されたものである。その後、笠岡城主村上景広が持ち帰って笠岡城に吊るし、時鐘にしていたと「備後略記」にある。

遍照寺本堂（笠岡市西の浜）

村上景広が備前に参戦したのは、永禄十年(1567)の「明禅寺合戦」、元亀二年(1571)の「児島通生本太合戦」、天正三年（1575）の「児常山合戦」の三度であるが、明禅寺合戦は負け戦であるから、この鐘を持ち帰ったのは本太合戦か常山合戦のどちらかではないかと考えられる。その後、笠岡城は廃城となりこの鐘は遍照寺へ移された。

遍照寺の元末寺であった西明院の過去帳に、「遍照寺梵鐘　西明院に吊る　吉祥快昌取り持ちて遍照寺に吊るなり」とある。

この鐘は、御崎宮（鶴崎神社）から笠岡城、遍照寺、西明院、遍照寺と移されたようだ。最後に遍照寺へ移されたのは、元禄五年（1692）に遍照寺が再建された年とされる。

現在は、遍照寺（笠岡市西の浜）仁王門の楼上に懸けられており、昭和三十四年三月二十七日に岡山県重要文化財（工芸考古品）に指定されている。

室町時代初期の小振りなもので、大きさは口径五五センチ、高さ九一センチ、重量は一六八キロ、乳は六四ケ完備している。

竜頭は単純な宝珠があり、双竜が笠から突出た棒を噛む格好で、彫りは深いが相貌のおとなしいものである。袈裟欅は和鐘の基本型式にしたがっていて乱れはなく、紐は細く均整がとれている。乳は茸型で小さく揃っている。中帯は広いが撞座は小さい。撞座文の蓮弁がはっきりしないが雄蘂帯は細かい彫りである。駒爪は古風な形をしている。鋳型の合わせ目からバリが残り、鋳上がりはともかく仕上げは良いとはいえないが、汐風に吹かれた鐘としては肌荒れのないものである。

遍照寺仁王門の楼上の梵鐘

県指定　工芸考古品

遍照寺の梵鐘

遍照寺の楼門に吊る梵鐘は、総高九一、〇センチメートル、口径五五、〇センチメートル、重量一六八、七五キログラムで、青銅製、室町時代に鋳造されたものである。

竜頭は背の高い双竜式とし、中央の宝珠はやや退化している。笠形は自然の弧線を描いてふくらみ、鐘身の上帯下帯は素文である。乳は一区一六個、全四区で計六四個ある。駒の爪ははっきりと張り出し、時代の特徴をうかがわせる。

銘文によると、永享四年（一四三二年）津宇郡撫河郷隼島庄から丑寅御前（鶴崎神社）へ寄進されたことがわかる。鐘はその後笠岡城（吸江山）を経て遍照寺に移されたと「備後略記」に記す。総体的に均整がとれており、鋳上りも優れた梵鐘である。

昭和三四年三月二七日指定

笠岡市教育委員会